

目次

論文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

動向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

報告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久

The American Schools of Oriental Research Annual Meeting 2013

Yasuhisa KONDO

キーワード：米国オリエント学会、会議報告

Key-words: The American Schools of Oriental Research, conference report

2013年11月20日から23日にかけて、米国メリーランド州ボルチモア市のシェラトン・ボルチモア・シティー・センター・ホテルにおいて、米国オリエント学会（The American Schools of Oriental Research; 以下 ASOR と略す）の2013年大会に参加した。ASORは1900年に米国考古学会（Archaeological Institute of America; AIA）、聖書文学会（Society for Biblical Literature; SBL）、米国オリエント協会（American Oriental Society）、および大学・神学校あわせて21校が発起して設立された（The American Schools of Oriental Research ed. 2013: 5）。百十余年の歴史を経て、現在はイェルサレム、アンマン、ニコシア、バグダード、ダマスクスに研究拠点を有し、会員数は約1,500名を数える。学会誌『米国オリエント学会紀要』（Bulletin of the American Schools of Oriental Research）の刊行でも知られる。事務局はボストン大学に置かれている。

2013年大会には、全米および諸外国から約900人が参加した。初日の基調講演では、ペンシルヴァニア大学考古学・人類学博物館（University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology）のチャールズ・ブライアン・ローズ（Charles Brian Rose）教授が、「武力紛争地域における文化遺産保護：教訓と未来戦略」と題して、アフガニスタンやイラクで戦災に遭った遺跡や博物館の復興に向けたAIAの取り組みを紹介し、現地国での人材育成と国際協力体制の構築が急務であることを訴えた。AIAは、現地駐留および派遣予定の米軍兵士や現地治安部隊要員に、文化財をまもることの大切さと被災時の応急処置（梱包保護）の方法を教えるプログラムを提供しているとのことであった。

大会2日目から4日目にかけては分科会が行われた。125分の時間枠が1日あたり4つ設けられ、それぞれ最大8つの会場で並行してセッションが行われた。セッション

の大半は口頭発表であり、他にワークショップ2本とポスターセッションが設けられた。口頭発表セッションには、ASORがあらかじめ用意したセッションと、提案型のセッションがあった。口頭発表の持ち時間は20分ないし25分であった。セッションには、(1) エジプト、レヴァント、イスラエル、シリア、アナトリア、キプロス、イラン、中央アジア、アラビアなど各地域の考古学を扱うもの、(2) 先史時代、青銅器時代、鉄器時代、アッシリア、ギリシャ・ローマ、ビザンツ、イスラームなど時代別の考古学を扱うもの、(3) 景観と集落、印章と封泥、動植物遺体、碑文、楔形文書、聖書と伝承、ペリシテ人など特定の研究対象を扱うもの、(4) 地域間交流やジェンダー、饗応（feasting）といった理論駆動型のアプローチや学史を扱うもの、(5) 考古科学、計測手法、地理情報システム（GIS）、データベース等の技術の応用を主に扱うもの、(6) 発掘調査や文化資源マネジメント（cultural resource management）などのケーススタディーを集めたものなどがあった。ASORの存在価値を議論するものや、研究助成の条件としてデータベースの公開を求められてどうしたかという事例を集めたユニークなセッションもあった。この他、おそらく提案型のセッションとして、アムク（Amuq）平原やイスラエルのテル・カブリ遺跡（Tell Kabri）、キプロスのポリス・クリスコウス（Polis Chrysochous）遺跡など、特定の地区ないし遺跡の調査成果を特集したセッションもあった。複数のコマにまたがるセッションとしては、多い順にギリシャ・ローマの考古学関連（5コマ）、考古学理論・学史関連（4コマ）、南レヴァントの考古学、南アラビアの考古学、キプロスの考古学、ヨルダンの考古学、近東の青銅器時代と鉄器時代、碑文、美術史（各3コマ）があった。いっぽう、近東考古学の中でも研究蓄積の進んだエジプトやシリア、イランの考古学は1コマずつであった。昨今のこれらの地域の不安定な政治情

勢を反映して、米国の研究者によるプロジェクトが減少していることを反映した現象であろう。ワークショップは、有機物残渣分析に関するものと、ヨルダンの文化遺産保護に関するものであった。ポスターは参加者が往来するロビーに展示されており、4日目の昼休みに質疑応答の時間(コアタイム)が設けられた。ポスターは横長でイーゼルに架けられており、コアタイムには人が集まっても見やすいように間隔を空けて配置し直されていた。

筆者が参加したセッションのうち最も盛況だったのは、「古代近東の集落景観」というセッションでイラク・クルド人自治区(クルディスタン)における最新の遺跡分布調査の報告が続いたひとときであった。そこでは、ハーバード大学のジェイソン・ウル(Jason Ur)がエルビル平原、アーカンソー大学のジェス・カサナ(Jesse Casana)がディヤラ川上流域とシルワン地区での調査成果を報告した。どちらも、人工地形改変の比較的少ない1960年代から70年代頃のCORONA衛星画像を用いたリモートセンシングと現地踏査を組み合わせ、既知の遺跡の再評価と新規発見に成果を挙げていた。1980年代以降、イラク領内に入れなかった時期に発展した空間情報技術を、調査が許されるようになってすぐに活用できるレベルにまで研究準備を進めていたことには、脱帽するほかない。両名の報告に続いて、ジョンズ・ホプキンス大学のグレン・シュワルツ(Glenn Schwartz)が急きょ登壇し、クルド・カブルスタン(Kurd Qaburstan)遺跡における2013年6・7月の発掘調査成果を報告した。クルディスタンの経済情勢と治安情勢が好転し、欧米の考古学チームが相次いで入境していると聞いてはいたが、踏査や発掘調査に本格的に着手できるほどに状況がよいとは知らなかった。ただただ驚くばかりのセッションであった。盛況ぶりから察するに、次回以降、クルディスタンの考古学が独立したセッションとして成立するかもしれない。

このセッションをはじめ、いくつかのセッションで気づいたのは、GISやリモートセンシング(衛星画像解析)といった空間情報技術が、あえて題名に記さずとも、自然な形で研究に組み込まれているということであった。また、「GISとリモートセンシング」と題して行われたセッションには、平均的な人数よりもずっと多くの聴衆が詰めかけ、空間情報技術への関心の高さをうかがわせた。

筆者が今回の大会に参加したのは、「南アラビアの考古学」セッションのオーガナイザーのひとりから、オマーンにおける地考古学調査の成果を報告しないかと誘われたからであるが、参加するまでは、ASORは聖書考古学とオリエント史が主流の学会という先入観を抱いていた。しかし実際に参加してみると、ASORは西アジア考古学を主

流とする学会であった。むろん、設立・発展の経緯からして「近東」(Near East)とくに南レヴァントの考古学が中心にあるのだが、アラビアやコーカサス、中央アジアなど、従来いうところの「オリエント」あるいは「近東」からみて周縁領域にあたる地域への展開や、自然科学や情報技術に基づく考古学を実践する方向へ、学界の潮流が向かっているように見て取れた。

さて、このように日本では知り得ない最新の知見・動向に触れられるのが、海外の学会に参加する最大のメリットであるが、書店ブースで最新の専門書を購入できることもまた、一つの利点である。ASORには、Archaeopress, Arkeoloji ve Sanat Yayinlari, Brill, Cambridge University Press, Left Coast Press, Oxbow, Oxford University Pressなど、考古学の洋書を取り扱う出版社・書店が数多く出展していた。ロビーの両側にブースがずらりと並んださまは圧巻であった。

大会の運営には、情報システムとソーシャルメディアが活用されていた。大会参加登録(会員登録)・発表申し込み・査読・会費決済などはすべてオンラインシステムで行う仕組みになっている。大会の情報はメールマガジン形式で定期的に配信された。また、会期中はTwitter(<https://twitter.com/AmerSchOrientRes>)でリアルタイムニュースが配信された。

今回は会場のホテルに宿泊したので、部屋からエレベーターでロビーに下りればすぐそこが会場であった。そのため、会議がおひらきになった後も、移動や帰りの時間を気にせずに、併設のレストランで飲み語らうことができた。学会を交流と親睦を深める場と位置づけるとき、ホテル開催は大変合理的な解だと感じた。

大会の予稿集には早くも次回大会の開催要項と早期割引の案内が掲載されていた。次回2014年大会は19日から22日にかけて、西海岸はカリフォルニア州サンディエゴ市のザ・ウェスティン・サンディエゴ・ホテルで催される。大会ウェブサイトは、会期終了後まもなく次回大会の案内に切り替わった。発表申し込みは2014年2月15日締切なので、この記事を読んで興味をもたれた方は残念ながら発表申し込みには間に合わないが、参加登録は直前まで受け付けてもらえる。大会の詳細については、ASORのウェブサイト(<http://www.asor.org/>)を参照いただきたい。

参考文献

The American Schools of Oriental Research (ed.) 2013 *ASOR 2013: Annual Meeting Program and Abstract Book*. Boston, The American Schools of Oriental Research.

近藤 康久
東京工業大学大学院情報理工学研究科
Yasuhisa KONDO
*Department of Computer Science,
Tokyo Institute of Technology*